
娼婦との恋

シロクロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

娼婦との恋

【Nコード】

N5720P

【作者名】

シロクロ

【あらすじ】

男の部屋の隣には娼婦が住んでいた。彼は彼女と友人で、そして彼女に恋をした。

とある文学小説から影響を受けて書いた小説です。

娼婦に恋した男（前書き）

別にエロくはないですが、一応性交描写があるので15禁にしておきました。全4話です。

娼婦に恋した男

ただ私は椅子に座った人の膝の間に入るの。すると真っ赤な熱いさ
おが差し出されるから、そこにほお擦りをして、痛いほどの赤みが
取れるように舐めてやるの。それだよ。

そんな風に言って笑った彼女の顔が、どうしてか頭から消えなくな
った。

友人としてならともかく、娼婦である彼女に特別な情を抱いたこと
はなかった。

気のむくまま、金を貰えば股を開く彼女を私はある種尊敬さえして
いたが、『女』だとは思わなかった。

初めて抱いた時だって、性欲を処理した以上に意味はなくて単に一
人で自慰をするより彼女を使った方が気持ちがい、という理由で
しかない。

隣に住んでいた彼女とは帰宅時間が同じだったから、挨拶をよくし
ていた。

私が彼女と深い付き合いを始めたきっかけは、私が女に振られて大
量のアルコールを腕に抱いて帰宅した時だ。

「なに暗い顔してんの？」

軽く、どこにでもいる普通の女みたいな顔をして彼女は声をかけて
きた。

その晩、私は彼女と酒盛りをして、彼女を抱いた。私にとって三人
目の女性体験だった。酒代の代わりだからと娼婦らしくもなく金を
請求しなかったのは私を憐れんだのか、それとも気まぐれだったの

か知らない。

それきりセックスはしなかったが、友人としての付き合いが始まった。

裸の付き合いが済んでいたからか、私と彼女は驚くほどすんなりと、まるで10年来の友人であるかのように馴染んだ。

以前の私ならば娼婦という存在を密かに見下していただろう。しかし今はそうではない。

たった一晩だが、彼女を抱いて私は確信していたのだ。体売ることはなにも汚いことはない。むしろ彼女は美しかった。単純な容姿ではない。女性経験の少ない私が言っても説得力はないかも知れないが、セックス中の彼女は誰より美しかった。

友人になってから知ったことだが彼女は昔から似たような仕事をしていたらしい。それが冒頭の彼女の言葉に繋がる。

「母親も娼婦でね。あたしの淫猥さは親譲りなのよ」

そう続けてにかつと笑う彼女は、どうしてか私の目に強く焼き付く。本番が出来ないころはフェラチオをしていたという彼女の言葉はオブラートに包まれていて、詩的なほどだったのにそれを聞いて私はペニスを起たせていた。

私は友人であり、まして女として意識していなかった相手との雑談中に勃起してしまったことを恥じた。

気取られないように私はさりげなさを装って足を組み、テーブルに肘をついた。

すると彼女はにっこり笑って、まるで私の姉であるかのような寛容さを持って私の太ももを撫でた。

「かわいい坊や、恥ずかしがることなんてないわよ」

全て、なにかもが彼女にはお見通しだった。私はカツと顔に熱が集まるのを感じた。

それは多くに羞恥心を含んでいたが、それよりも強い怒りが原因であることは自覚していた。

「淫売が私に触るなっ」

手を振り払い、心ない罵声を浴びせた。

私は今まで温厚に生きてきたので、このような言葉を口にしたのは初めてだった。ひよっとすると声も裏返っていたかも知れない。

この時私は反射的に彼女に酷い仕打ちをしたにも関わらず、同時にこれでもはや友人関係は破綻するだろうと歎いていた。そして奇妙なことに、二度と彼女を抱けないのだと悲しくなった。

おかしい話だ。私は彼女と恋人ではないし、友人でなくとも彼女は娼婦、金さえ詰めばいくらでも股を開く相手だ。

しかし、私の予想に反して彼女は微笑んだままだった。むしろますます笑みを深くした。弓を描く真っ赤な唇がなまめかしく、私はそれに見入った。

「まあ、非道い人ねえ。ふふ。でもそうよ、私ったら淫売なの。あな た っ たら 知 ら な っ た の？」

平然と言う彼女に、私はもはや言葉を紡ぐことはできなくなった。

全て見透かされていることが明白で、単純な自分にいらついたことさえ恥ずかしく、先程の激昂が嘘みたいに、私の怒りは羞恥にとつてかわった。

そして確信した。

私は、この女に惚れたのだ、と。

「んー？ どうしたの？ 黙っちゃって」

「…何でもないさ。君には関係のないことだ」

覗き込んでくる彼女の瞳が直視できなくて私は顔をそらしてまた憎まれ口を叩いてしまう。

「なによ、もう、照れちゃって」

「言ってるよ」

からから笑う彼女に、私はどうしようもなく惹かれていた。

その日、私は久しぶりに彼女を抱いた。

私が彼女を愛してしまったことはもはや隠しようがなく、彼女はやにやしなから私が望むだけ肌を晒した。

それでも私は決して彼女に好きだ、なんて陳腐なことは言わなかった。堪らなく思いが口から零れそうになった時は自分の竿を経由して白い液体に代えて彼女へ振り掛けた。彼女は全部わかってるみた

いに笑っていた。

彼女は相変わらず娼婦で、平日はいつも私の知らない男に抱かれていた。平日はいつも私も働いていた。だから友人だった時と変わらず、私は平日は挨拶だけで休日には一緒に過ごすという形になった。

「ねえ」

「なんだ、売女」

私は彼女に愛情を自覚してから、彼女に汚い言葉を使うようになっていた。

どうしてかは自分でもはつきりしない。

ただの照れ隠しなのか。

娼婦の彼女を本当は見下しているのか。

それとも、娼婦であることをおとしめることで彼女が娼婦であることを責めているのか。

私には判断がつかない。

娼婦の彼女が好きだ。間違いない。だけど、彼女が私以外の男に抱かれていと思うと気が狂いそうだった。矛盾しているのは承知の上だが、感情は理性に従わない。むしろ理性の方が屈服しそうだ。

「私、あなたが好きよ」

雷が、落ちたかと思った。

世界が真っ白になって、ネジのきれたロボットみたいに頭がまわらなくて、思えばかりが胸にあるのに言葉にならなくて、死んでしまったように感じた。

いつもと変わらないはずの猥らな笑みが天使の微笑みに見えた。

でも、私も好きだ、とは言えなかった。

「あなたのせいで他になにも見えなくて一瞬も他のことを記憶できないの。信じられる？ 私、セックスをしている相手をあなたと間違えたの。こんなこと、初めてだわ」

それが最高級の恋の言葉だと私にはわかった。彼女は娼婦としてしっかりと公私をわける人間だ。間違ってもなにも、客とのセックスの最中に他のことを考えたことすら彼女はないだろう。なのに、私を思い浮かべるばかりか相手と間違えたというのだ。

これが恋や愛でないのなら、この世は全てクソツタレの糞溜まりな地獄の便所に違いない。

私も好きだ、愛してる。

と、言いたかった。けど言わなかった。言えなかった。

「口が上手い阿婆擦れだな」

私は気づいたらまた暴言を吐いていた。

いや、気づいたらではない。私は愛の言葉を拒否して、その結果正反対のことを口に出してしまっているのだ。

今、好きだとか、愛してるなんて言ってしまったらとまらない。

きつと私は日が沈んでも彼女に甘い言葉を吐きつつけて私の語彙が枯れればすぐに彼女にプロポーズしてしまう。

それでは、駄目だ。まだ私は結婚できるほどの甲斐性はない。

だからプロポーズするわけにはいなくて、愛してるなんて言えない。彼女に娼婦をやめてくれなんて、言えない。

彼女は悲しそうな顔になった。当然だ。私は今すぐ平手打ちをされて道端にボロキレのごとく捨てられても文句の言えない所業をした。なのに、悲しそうなまま、彼女はそつと微笑んだ。

「…あなたが私を愛してるなんて、知ってるわ。言葉にしなくたって、いつも伝わるわ。でも…今日くらい、言ってくれたっていいじゃない。いくら私でも…本当は私ばかりが好きなんじゃないかって、自信を失ってしまうわ」

今日くらい？ 今日、今日はなにかあったか？ 彼女の誕生日は先々月だし、私はとくにすんだ。

「今日がどうしたって言うんだ」

「今日は…私とあなたが初めてセックスをした日よ」

「え…」

それは…気づいていた。でもきつと彼女は覚えてないだろうし、一年目のお祝いだなんて女々しくて馬鹿にされるだろうからなかったことにした。

「忘れてたのね、酷い人」

「覚えてるよ。でも淫乱な君のことだ。気まぐれの一晩の日付なんて覚えてないだろうと思っていたよ」

「忘れないわよ。だって…私が生まれて初めて恋をした日だもの」

え…？

言葉が出なかった。彼女の潤んだ瞳があんまりに綺麗で、美味しそうなくらいだ。

「私、もう、ずっとあなた以外に抱かれてないわ。あなたのペニスにしか感じないの」

さらに続けられた言葉に私は混乱する。そんな、私の今までの狂気は、葛藤は、暴言は、なんだったのか。

「……なん…だって今、抱かれた時って…それに、じゃあ、今どうやって金を稼いでるんだ？」

「本番までいなくても、道はあるわ。前に言ったでしょ。昔は私、口だけでやってたんだから」

腕が震えた。いや腕だけじゃない。私を形造る肉体が、私を私にする精神が、全てが震えていた。彼女への、愛によって。

「客と最後までしてたのは、さっきのことがあって、あなたと二回目の夜を過ごすまでよ。それからずっと、私はあなたしか受け入れてないわ」

「…ど、どうして、今までに言わなかったんだ」

「だって、だって…私ばかりが好きみたいで、悔しいじゃない」
「っ」

もう我慢ができなかった。

彼女を悲しませたくないというのはもちろんあったけれど、それよりも、もはや私の中にこの感情を閉じ込めておくことは不可能だった。

私はずっと言えなかった、言わなかった、言いたかった言葉を吐きだした。

「愛してる…!」

条件反射に近かった。気づいたら私は彼女を抱きしめていた。

「愛してる愛してる愛してる愛してる愛してゐる愛してゐる愛してゐる愛してゐる愛してゐる愛してゐる愛してゐる愛してゐる愛してゐる」

私の語彙のなんて貧困なことか、そしてなんて私は単純なんだろう。やはりと言うべきか、私はもう彼女への愛しか表現できない。

愛が噴き出して、私の全てが彼女への愛で構成される。今の私はただの愛だった。

「死ぬほど好きだ！死ぬまで君を愛しつづける！だから私と結婚してくれ！」

先の私は何故曰が暮れるまで甘い言葉を捧げるなんて思ったのだろ
う。

私は詩人でもなんでもなく、ただ彼女を愛してるだけなのに。こんなにも尽きることなく勢いよく噴水のように溢れる彼女への愛を小出しにして囁くなんてできるはずもないのに。

私は彼女にキスをして服を脱がせた。

彼女の返事は聞かなくなつたつてわかる。目を見れば手にとるように彼女の気持ちができる。

まるで昨日までとは立場が逆だった。私は彼女へひたすらに愛を言葉にし、彼女は私へ言葉をかけなかった。

首筋へ唇を落とし、私を抱きしめてくる彼女の程よい乳房をもみし
だく。

喘ぐ彼女がいつもよりさらに美しいのは、愛をあらわにしたからか、

それとも私だけのものだからなのかはわからなかった。
ただ神懸かり的に彼女は美しかった。

白く丸い臀部をなぞって私は彼女の花園に指をはわす。湿ったそこは少し撫でればすぐに口を開いた。

いつもは涎を垂らしただらしない口、とでも言うが今日は違う。
もはや自分に嘘をつく必要なんてない。

「ああ、君の美しい花びらが朝露をこぼしているよ」
「…ばか」

どうやら彼女には受け入れられなかったらしい。詩的にしたつもりだったが、下品な物言いにはかわりがないからか。しかし実際に、私にはそう見えているのだから仕方がない。

私はズボンを脱いで彼女にキスをしながら膨張したペニスを挿入した。彼女だけではなく、私もとうに準備が完了していた。

彼女の中はまるで私のためにあしらえたかのようにピッタリで、私を極上の快楽へと導く。

私は睾丸がからっぽになるまで愛の言葉と愛の液体を彼女へ注ぎこんだ。

娼婦を愛した男

全てを放ち、精も根も尽き果てた私は彼女を抱きしめたまま横になった。

彼女の長い髪が顔にかかり、私はその香り気が遠くなりそうだった。

「ねえ、寝ちゃった？」

しばらくして彼女が身じろぎしながら声をあげた。

「いや、起きてるよ」

「そう。私、お腹減っちゃった。なにか作るわ」

そう言っただけで立ち上がる彼女は当然裸で、恥じらわない彼女に私は神秘性を感じた。こんなにも美しいものが存在し、私の隣にあることに私は久方ぶりに神に感謝した。

彼女は簡単に、パスタを茹でた。そういえば昼を食べていなかった。そろそろ夕方なので、腹も減るわけだ。

彼女のパスタは毎週味わっていたが、やはり今日は格別だった。彼女への愛で脳が蕩けてしまったのかも知れないが、それならそれで本望だった。

「ハニー、さっき私が言ったこと、覚えてる？」

「勿論覚えてるけど……なにそれ」

「愛する人をハニーと呼んで、なにか問題が？」

「問題……はないけど……まあいいわ。で？ さっきの告白がどうでした？」

「ああ、さっきの言葉、本気だけどあと少し待って欲しいんだ」

申し訳なく思いながら切り出すと、彼女は何故か固まって視線を泳がせた。

「……えーっと、さっきのというと？」

「だから結婚だよ。あと…そうだね。1年くらいは待つて欲しいんだ」

「い…1年後に結婚するって？ あなた正気？」

信じられないとばかりに目を丸くする彼女に、私は疑問を隠せない。どうして結婚を拒否するようなことを言うんだ。

「確かにまだ私は頼りないかも知れない。でも実は最近、転職の話があつてね。1年ほど向こうで頑張れば出世できそうなんだ」

「そうじゃないわ。だって私は娼婦なのよ？」

私には彼女が何を言っているのかわからなかった。そんなことは百も承知で、とつくの昔に了解済みだ。

「そんな…だって…」

「ハニーは私と結婚したくないのかい？」

「……」

彼女は黙って俯いた。

なんてことだ。こんなにも愛しているのに、結婚を拒否されるなんて。絶望がじわじわと足元から私を侵食する。泣いてしまいそうだ。

「だって、だって…私だって、あなたが好きだけど…あなたと私じゃ、釣り合わないわ」

「そりゃあ、君は美しいけれど。私だって別に不細工というほどじ

「やあないだろう?」

「ああ、馬鹿な坊や。そんな話じゃないわ。あなたはしっかりと教育を受けた人間よ、私みたいな底辺の人間と結婚だなんて、あなたはだから坊やなのよ」

彼女の物言いに今度は言いようのない苛立ちが沸き上がってきて、私は彼女の腕を掴んで引き寄せて無理矢理キスをした。

「んっ…な、なによ」

「私は君を愛してる。死ぬまで愛してる。約束するよ。だから私と結婚しなさい」

「は…なに」

「私が君を一生愛するのは決定事項だ。もし君が私と結婚しないなら、私は一生独身で一人淋しく余生を過ごすことになる。君は好きな男がそんな目にあってもいいのか」

「な……なによ、それ。どという脅し文句よ」

理路整然とドミノのように完璧に並べた理屈にどうしてか彼女は呆れたように口を開けてため息をついた。

「結婚するの? しないの?」

「…ああもう、わかったわよ。仕方ないから、あなたが死ぬまで愛してあげるわよ、ベイビー」

「誰がベイビーだ」

「愛する人をベイビーと呼んでなにか問題が?」

「大有りだ…けどまあ、子供が生まれるまでなら、許す」

「もう…ほんと、ベイビーちゃん、好きよ」

キスをされた。

ああ、もはや彼女のいない人生なんて考えられない。一年、なんと

しても一年で帰ってこよう。それ以上彼女と離れているなんて我慢できない。

「ハニー、一年待つてくれるか？」

「待つわ。ただし遅れたら迎えに行くから、その時はベイビーちゃん、素直に私と手を繋ぐのよ」

「わかったよ」

本当は転勤の話は断るつもりだった。彼女と一分一秒だって別れたくない。けどもはやそんな我が儘を言ってる場合じゃない。私はもう彼女とずっと一生一緒にいると決めたのだから、約束をしたのだから、約束を守るために私は努力をしなければならぬ。私は、約束を守る人間なのだから。

久しぶりの町並みは記憶の中とあまり変わらない。それはそうだろう。たった一年でそうそう変わるはずがない。

だけど私の目には懐かしいどころか何もかもが新鮮に見えた。一年ぶりに彼女に会えるという事実が私の目に映る世界を輝かせているのだろう。

そう、一年。私は一度も帰省出来ず、ましてここ二ヶ月近くは彼女と手紙一つ交わしていない。

元々多忙だったがさらに滞在が伸びるかも知れないとなってからこ

の半年は死に物狂いで働いていて、ここ二ヶ月は実は記憶が殆どない。それだけ忙しかったのだから、仕方がない。彼女もきつとわかってくれるだろう。

それに何より約束通り一年でこの町に帰ってきたのだ。きつと許すどころか私を笑顔で迎えてくれるに違いない。

この日のために、向こうに行つてすぐに彼女のために指輪を買っている。彼女の好きな緑の宝石がついた指輪だ。

この服の内ポケットにいれて……いれて、置いたのだけがない。何故だ。

「……ええい、構うものか」

私は内ポケットを押さえた手を降ろして、止めかけた足をさらに速くして動かした。

大方、無くさないように引き出しにいれて忘れてしまったのだろう。また今度、渡せばいい。

早く彼女に会いたくて、私はついに走り出していた。私はもはやどこを走っているのかどこに向かっているのかさえわからなくなった。ただ確かに彼女の元へ向かっている。

ああ、会いたい、会いたい、会いたい、会いたい。早く会いたい。

「ハニー！」

声をかけると彼女は振り向いて、大きく瞳を見開いた。

連絡していないとはいえ、今日はあの日からちょうど一年なのだからそんなに驚かなくてもいいだろう。いやそれともやはり、彼女も私と会えたのが嬉しすぎてそれが驚きになって現れているのだろうか。

「ハニー、ああ、会いたかったよ。ずっと君に会いたかった。愛してるよ」

「近寄らないで！」

「っ！？」

腕をひろげて彼女を抱きしめようとさらに足を持ち上げて、なのに彼女は叫ぶように私を拒否して後ずさった。
あとほんの3mの距離なのに、遠い。

「ど、どうしたんだい。今日は約束の一年目じゃないか。君と結婚をしに帰ってきたんだよ」

彼女は泣きそうなくらいに引き攣った顔で、極寒の地にいるかのように体を震わせて、手にしている花束を抱きしめた。花束の包みが音をたて、茎が折れ曲がった。

はて、どうして彼女は花束なんて持っているのだろう。もしや私へのプレゼントで、先に見られたから怒っているのだろうか。

「帰って！ 今すぐ私の前から消えて！」

「な…なにを、言うんだ」

「…もう、私のことは忘れて」

意味がわからない。私は彼女を愛していて彼女も……

「その、指輪……」

彼女の左手薬指には、私のものとよく似た緑の石がついた指輪がはめられていた。

「…私がない間に、他に男ができたんだな、売女」

「っ……そうよ。だからもうあなたと会わないわ」

「ファック！ このっ、クソツタレのクソビッチが！」

久しぶりの罵倒が口をついてでて、私は泣きそうになる顔を見られなくて彼女に背を向けた。

「お前は最低の阿婆擦れだ。最高の愚か者だ。お前なんかを本気で愛するやつなんて、私しかこの世にいないんだ」

「……」

声が震えるのが抑えられない。彼女はきつと私が泣いているとわかってるだろう。なのに彼女は何も言わない。

クソツ、クソツ、クソツタレ！！ どうしてたった一年も待てないんだ！ 私は彼女を愛しているのに！ 彼女以外には女が目に入らないのに！

あんなにも私に心を開いたと思ったのに！ 開いたのは体だけで本気ではなかったのか！ 好きだと言ったくせに！

涙が止まらなくて、彼女の顔を見れなくて、私は元来た方向へ足を出した。

「待つて」

「……」

彼女の言葉に足を止めた。

なんだ、今更なに言う気だ。否定でもする気か。

私の心はどす黒い気持ちで溢れていた。彼女への愛情の全てがどぶの中へ突っ込まれたかのように色を変えていた。

それでも、もし彼女が否定するなら、仮に否定の言葉が偽りでも、私はまた彼女を振り向ける。

だから、頼むから私を好きだと言ってくれ。私を引き止めてくれ。

「振り向かないで聞いて。約束、守ってくれてありがとう。すごく嬉しいわ。だけど、永遠にさようなら。ベイビーちゃん、別れの挨拶ができて、よかった…」

「クソツタレッツ!!」

私は悪態をついて走り出した。

彼女は私を引き止めない。なんてことだ。私は一生彼女を愛すると約束したのに、そんな私をつるといのか。

約束なんてまだ守れてないのに。どうしてそんなことを言うんだ。

「クソツクソクソクソクソクソクソツタレッツ!!」

走って走って、足を緩めた。

とつくに彼女がいない場所まで来た。それどころか、ここはどこだろう。何も考えずに走って、私は知らない場所まで来てしまった。

クソ…

それでも涙はとまらない。

諦めない。私は諦めない。一生愛すると言った。それは彼女にした約束じゃない。私自身がそうすると決めて私自身とした約束だ。

だからまだ愛してる。裏切られたとしても愛してる。ずっとずっと愛してる。死ぬまで愛すると決めたんだ。

明日こそ、指輪を持って行こう。拒否をされたら明後日も持って行こう。

そうだ、手紙を書こう。私の思いをもう一度伝えよう。それでも駄目なら、また彼女の隣の部屋を借りよう。

彼女が私への愛を失ったのなら、また最初から始めよう。

そうだ、そうしよう。私の一生は、彼女に捧げると決めたのだ。いくらだって時間をかけて彼女を幸せにしよう。

私は涙を拭った。

「
」

ふいに、誰かが私の名前を呼んだ。その声は彼女ではなくて、でも聞き覚えがあつて私は振り向いた。

そこには、年上の、どこかで見た覚えのある女がいた。女はにっこり笑つて私に手を差し出した。

「あ……」

私は女が誰かを思いだした。15年ぶりだ。とても懐かしくて、嬉しくて、悲しくなった。

そして私は、約束を守っていたことを知ってまた泣いた。

女は泣き止まない私の手をひいて歩きだした。

恋を知った娼婦

最初はいけ好かない男だと思った。

引越しの挨拶にきた彼は私の薄い衣姿に眉をしかめていたし、インテリぶった銀縁の洒落た眼鏡が似合う顔つきもまた私の好みではなかった。

しかも

「女性がそんな格好で玄関ドアを開けるなんて無用心ですよ」

と注意までされた。私は内心イライラして、彼のことを小馬鹿にしながらいドアを閉めた。

次に会ったのは帰宅時で、どうやら彼と時間がダブっているらしい。彼は私の格好を見て、私の職業に気づいたらしくまた眉をしかめた。嫌な隣人にあたったものだと思いながら顔を背けようとした瞬間、

「こんばんは」

と彼は私に挨拶した。

「あ、こ、こんばんは」

反射的に挨拶を返すと彼はさっさと自分の部屋へ帰った。次の日も、次の週も彼は欠かさず私に挨拶をした。

なんて育ちのいいお坊ちゃんなんだとは思ったけれど、無視するのにも大人げないので私も挨拶を返していた。

ある日の休日、夕方になって買い物に行こうとした。昼から続く雨

はますます強くなっていたけど夜になれば危険なので仕方がない。ビニール傘を持って出かけようとすると郵便受けの前でちょうど彼と会った。彼は今帰ってきたようだ。

「こんにちは、酷い雨ですね」

彼はなんでもないように話かけてきた。彼から挨拶以外の言葉を聞いたのは久しぶりだった。

「こんにちは。そうね。この分だと夜も降ってそうね」

「そうですね。足元にお気をつけて行ってらっしゃい」

驚きすぎて凝視してしまった。行ってらっしゃい、なんて久しぶりに言われた。

「…い、いってきます」

答えると彼は軽く微笑んで中へ入って行った。

私は、思ったよりいい人だと彼の評価をあげた。挨拶も隣人への義務ではなくてちゃんと私に言っていたんだと思って、何だか今まで彼をひそかに馬鹿にしていたのを恥ずかしくなった。彼も少なからず娼婦の私に偏見を抱いているのだからおあいこだろうけど。

それから、何日だったか。特にお互い不干渉で、彼の印象がかわつてそろそろ一年は経つという頃。彼は珍しく暗い顔をしていて私は思わず声をかけた。

「いえ…別に」

ふてくされたような顔の彼の顔を見た瞬間、私は彼とセックスがし

たいと思った。（後から思うが、この時に私は彼に恋に落ちたのだろう。）

私が娼婦をするのはセックスが好きで、たくさんお金が稼げるからだ。だからたくさんの人とセックスをした。

彼とのセックスはそんな今までの情事を全て忘れるくらいに気持ち良かった。彼は別に女慣れをしているわけでもなかったのに、どうしてか不思議だった。（今ならわかる。それは恋をしたからだ。）

娼婦を抱いたことのないエリートなお坊ちゃんと、私はそれから友人になった。

休日と一緒に過ごす、当たり前だけど彼についてのたくさんのことを知った。

母親をとくに亡くして父との二人暮らしで家事は彼が担当していたこと。

だから料理も得意で私より上手なこと。

質素な生活だがやはり、私が思う通りに中々の資産家であること。

休日を共に過ごす友人はいないこと。

読書が趣味で、友人がいないことは気にとめていないこと。

私と本の趣味は似ていること。

大きな会社に勤めていること。

私より3つ年下なこと。

眼鏡を外すと年より幼く見えること。

少し口うるさくて、律儀で世話焼きなこと。

でも抜けてるところもあって結構おっちょこちょいなこと。

初心で可愛いこと。

考えを押し付けないけど頑固で、絶対自分で決めたことは変えないこと。

少しずつ、彼のことを知っていった、少しずつ、彼のことを好きな

気持ちが増えて言った。

そしていつの間にか、私はとくに彼に恋をしていたのだと気づいた。

そしてセックスをしても、気持ちいいと思わなくなった。仕事だからと割り切ってやっていただけしばらくすると彼とセックスしたくて我慢できなくなった。

私はセックスなしには生きれない。だから娼婦だったのに、娼婦の仕事のセックスを私はセックスに思えなくなってしまったのだ。

彼を誘惑するのは簡単だった。

彼は一度抱いたことで少なからず私を意識していたし、私には彼より経験が豊富だった。

勃起を隠す彼が可愛くて、私は彼の太ももを撫でた。

すると彼は明らかに欲情しているのに、目に怒りを灯らせて私の手を振り払った。

「淫売が私に触るなっ」

彼があからさまに私を罵倒したのはこれが初めてだった。彼は泣きそうな顔をしていて本心でないことはわかっていた。

それに私は罵倒されることに慣れていて、そんな捻りのない単語をぶつけられたくらいで傷つくことはない。

むしろ慣れない言葉を口にするために声が裏返り目を見開いている彼の姿に私は虚勢をはる小動物みたいな可愛さを感じて、愛おしくてたまらなかった。

一緒にいてもまだ知らなかった、彼の素直じゃない一面を知って、

嬉しくなった。表情は素直なのに言葉はなんて素直じゃないんだろ
う。

私はその日彼に抱かれた。

そのあまりの気持ち良さに、私はもう他のペニスを受け入れられな
くなった。

一人とだけセックスをして、それで満足をするなんて自分でも信じ
られなかった。週末の僅かな時間にまぐわえば、私は平日に快樂が
なくても何の問題もなかった。

一度の稼ぎは少なくなっただけれど回転が早いので、多少質素にすれ
ば急激に生活レベルが下がるということはなかった。

彼と初めてセックスしてから一年目、私は今まで曖昧にしていた思
いを口に出した。

「好きよ」

彼は私と今の特別な関係になってから、口が悪くなった。といって
も私のことを売女とか娼婦とか子供のように稚拙な悪口だけで、た
わいのないものだ。それに彼の表情からは私への愛情がたやすく読
み取れるくらいに優しいから、むしろ彼の罵倒は耳に心地好いくら

いだった。

思いを告げても彼はきつと言葉を返してくれないだろうとはわかっていて。どんなに夢中に愛しても彼にとって私は娼婦で、言葉に出して認めたりはしないだろう。

だけどそれでも言ったのは、彼の喜ぶ顔が見たかったからだ。眉をなだらかにして目に優しさを湛えて口角をきゅっとあげてされる罵倒は、きつと私に彼の愛情を感じさせてくれるだろうから。

なのに、彼の反応は予想と違った。彼は私を見つめ、顔から表情を全く無くしていた。まるでありもしない幻覚を見たかのように、彼は無表情だった。

あたかも、私が彼を好きであることが予想外みたいに、彼が私には全く本気ではなかったみたいに。

私は一瞬でも沈黙をつくるのが恐ろしくなって、さらに彼に言葉を重ねた。

言うはずではなかった、娼婦としては恥である彼への気持ちの根本とも言える出来事を暴露していた。

「口の上手い阿婆擦れだな」

なのに彼は無表情のままいつもと同じ様に私を馬鹿にした。

それが笑顔なら、私も笑顔に慣れたのに、私は悲しくて恐ろしくて、今までの自信を全て失ってしまっただけ泣きそうになった。

それでも私は微笑んだ。彼にフラれたくらいで涙なんて見せたくないかった。

だから、私を愛してることはわかってしていると強がりをつた。それでも今日は、と私から弱音が出た。

それに彼はようやく感情を取り戻したかのように疑問を浮かべた。でも、そう、やっぱり忘れてる。本当に本当は、私になんて本気でなかったのだ。

わかってる。娼婦に本気になる人がいるわけがない。娼婦になった時からそんなことわかっている。

快楽と金に負けて娼婦になった私が、好きな人と幸せに暮らすなんて、そんな平凡で人並みな幸福を夢見ることはもはや許されないのだ。

それでも私は言葉を続けた。止めてしまえば彼に別れを切り出されるかも知れないと恐ろしかった。

彼が私に本気でないのなら、私の本気を伝えることが無意味で、むしろ煩わしいと思われるだなんてわかっているのに、私は彼に全てを話した。

最後だから伝えたかったのか、ここまで言えば優しい彼は心を動かすか、悪くとも同情してくれるかも知れないと計算したからなのか、自分のことなのによくわからなかった。

「なんで、今まで言うてくれなかったんだ？」

全て聞いた彼は驚きながら、どこか上擦った声でそう尋ねてきた。何故黙ってたか？ そんなことは決まっている。普段なら恥ずかしいから絶対に言わないけれど、今以上に恥ずかしい時間なんて存在しないだろうから私は理由を口にした。

「だって、だって…私ばかりが好きみたいで、悔しいじゃない」

あまりにも子供じみている私の本音。彼は私を悪く言う。それも嫌いじゃないけど、言葉で好意を表して欲しいと思う時だつてある。彼が言葉で認めるまでは。言わないでおこうと思ったことも全て言つた今となつては言つても言わずとも同じことだ。

それでも口に出すとやっぱり恥ずかしくて彼から視線をそらした。

「愛してる！」

抱きしめられた。

意味がわからない。思わず彼を見る。

「愛してる」

彼は繰り返し何度か何度も、馬鹿みたいに私に同じ言葉を放つ。

「死ぬほど好きだ！　死ぬまで君を愛しつづける！　だから私と結婚してくれ！」

抱きしめられた温かさとか、初めての彼の愛の言葉がプロポーズとか、色んなことがごちゃまぜになつて泣きそうになつた。

私はなにも言えなくなつて、好きだとも嬉しいとも伝えられなくて、なのに彼は全部わかつてるでも言いたげに私にキスをした。

優しく私を愛撫しながら私の服を脱がせた彼は、自分も服を脱ぎだした。

彼は筋肉質ではないし、私ほどではないけど一般に比べ色も白い。だけどその少し薄い胸板に頬を寄せるととても心地好くて、私は凄く安心できる。

ほんのり香る汗の臭いも消して不快ではなくて、むしろ薄いからも

つと嗅ぎたくて鼻を押し付けたくなくなるくらいだ。

私とキスをしながら彼は私の乳房をもみしだく。

彼の指は長い。少し角張ったペンダコのある彼の指が私に触れるのが私はとても好きだ。

短く揃えられた爪で胸の芯を弾かれて私は甘い声をあげた。

そして彼の指が私の足の間に触れると、すぐに私の体は彼を受け入れるようになる。

「ああ、君の美しい花びらが朝露をこぼしているよ」

彼の馬鹿みたいな言い方に普段なら笑いそうになるはずなのに、どうしてか今はいつものありがちな下言葉よりもずっと私の羞恥を煽る。

「…ばか」

顔を隠しながらついた悪態は自分らしくもない力ないもので、自分がまるで幼い子供になってしまったように感じた。

そしてついに力強い彼のペニスが私の体を貫くかのごとく中に押し入ってきた。

彼は言葉と共に私に愛を注ぎ込み、私はそれを心から受け入れた。どうしてか今までよりも、今まで以上に気持ち良くて私はまるで天国への階段を上っているかのように錯覚しそうだった。

これ以上の快樂がこの世に存在するはずがない。私は今、世界一の快樂を味わっている。

とても幸せで、
幸せ過ぎて、
泣きそうだった。

愛を知った娼婦

長い時間、私たちは愛し合っていた。

ようやく性がつきたのか彼は萎えたペニスを引き抜いて、私を軽く抱きしめたままベッドに横たわった。

凄く幸せだったけれど、終わると急激に疲労が私を襲った。

気がつけば、もう昼を過ぎている。寝てしまうのもいいだろうが、お腹が減った。

私は彼の腕をすり抜けてキッチンに立つ。彼に尋ねて彼の分も手早く昼食を作った。

「いただきます」

彼がご飯を食べる姿も、私は結構気に入っている。

彼は自分の方が料理が上手なくせに、女なんだからと私にさせようとする。それはちょっと気に食わないけど、彼はあんまりに美味しそうに、嬉しそうに食べるからまあいつかなって思ってしまう。

くつと口角をあげて薄い唇をあげて料理を口に入れ、律儀に30回噛んでからちよつとだけ顎をあげて目を細めながら飲み込むのだ。

どうしてこんなに好きなのか、自分でもわからない。でも、凄く凄く、とにかくもう言葉にできないくらい、彼が好きだ。

彼と別れたって、きっと一生彼を忘れたりなんかしないだろう。

年をとって一人になって、この仕事から足を洗うところには新しい何か日雇いの仕事について、そして休日には日がな一日彼のことを思うのだ。

ああ…それは、素敵なことではないか。娼婦である私が一生をかけて思える人ができるなんて、私はとても幸福な人間だ。

食べ終えてふう、とひとごちついてから少しばかり深刻そうな顔になって私に向き直る。

その凜々しい顔つきにほんのりときどきしながら、私は口元を引き締めて彼の言葉を待った。

「ハニー、さっき私が言ったこと、覚えてる？」

は、ははは、はにー？　なんですかそれ？

最初の単語が強烈過ぎて後半なに言ってるか頭から飛び出そうなんだけど。

困惑しながらも、覚えてると返しつつ尋ねると彼はキョトンとしてる。

どうやら彼の中では付き合う＝バカップルになることが当たり前らしい。

でもそれより今の仕種が可愛い。もうこの子ちょっとどうにかして可愛くて格好よくて本当にどうなってるの。もうこの際バカップル呼びでもいいわ。許す。

気を取り直して彼に質問の意味を尋ねる。

「ああ、さっきの言葉、本気だけあと少し待って欲しいんだ」

さっきの言葉と言えば告白だ。告白だが、待つ、とは何だ？　該当するのは単語的に結婚しかない。しかしまさか、本気で私と結婚しようというわけではあるまい。

私は娼婦だ。そんなこと、いくら彼が愛してくれてようというわけ

がない。

彼は単純だから、勢いで愛を表すために結婚という単語をつかったのだとわかっている。まさか本気で結婚しろなんて言わないし、あれで婚約したつもりになんてなっていない。

なのに彼の様子では告白のうち何かを待つ、つまり後日にして欲しいという実行すること前提のものいいだ。

私は勘違い女にはなりたくないので恐る恐る意味を聞くと、恐るべきことに彼は一年後に私と結婚しようと言った。

「い…一年後に結婚するって？　あなた正気？」

思わず私は彼に尋ねた。

彼が真面目に真剣に言っていることなんてわかっていても、それでも言わずにはいらなかった。

彼は一年で出世するからとまるで検討外れなことを言い、私が娼婦だと改めて告げても何を言っているのだとむしろ訝しげな顔になった。

「ハニーは私と結婚したくないのかい？」

そんな、そんな言い方はずるい。NO、だなんて言えるはずがない。その方が彼にとって良いことだとわかっていても、私には彼の甘言を拒否できない。

私が俯きながら釣り合わないわと言うと、彼は私が美しい、だなんてまた検討違いなことを言う。

私は笑いたいような泣きたいようなごちゃまぜな気持ちになって、馬鹿な坊やと余裕のあるみたいな振りをした。

「っ」

腕を引かれてキスをされた。文句を言おうとしたら、死ぬまで愛するから結婚しなさいと何故か命令形で言われた。

「私が君を一生愛するのは決定事項だ。もし君が私と結婚しないなら、私は一生独身で一人淋しく余生を過ごすことになる。君は好きな男がそんな目にあってもいいのか」

さらにそんな風に馬鹿らしい、脅しにも似たことを真剣に言う彼に、私は笑うより喜ぶより呆れてしまった。

「結婚するの？　しないの？」

「…ああもう、わかったわよ」

私はついに折れた。結婚なんてするはずないと決めつけていたからか、いざ本気で言葉にするのは妙に気恥ずかしい。

「仕方ないから、あなたが死ぬまで愛してあげるわよ、ベイビー」

坊やをやめて、彼に合わせてベイビーと呼び方を変えた。

ああ、なんて私らしくない。だけどそれも、悪くない。

しかし彼はどうかやらベイビー呼びが気に入らないようだ。ダーリンの方がよかったのかしら。でも今更変えるのも恥ずかしい。私は彼の口調を真似てベイビー呼びを納得させた。

「ベイビーちゃん、好きよ」

少し拗ねた彼が堪らなく可愛くて今度は私からキスをする。

そして彼は一年転勤し、帰ってきたら結婚すると約束をして慌ただしく次の週には出発した。

一年、会えなくなるにはあまりに急で、長い時間だ。だけど私は何も心配してなかった。彼と出会ってまだ一年と少しで、一年別れてしまうのは確かに長いけど、彼は約束を守る、馬鹿みたいに律儀な人だから、私には何の不安もなかった。

彼が旅立ってから一年、私は花束を手に歩いていた。花屋に寄る一連の行動がもはや日課になりつつある。さて、今日は何を話そう。

「ハニー！」

一年ぶりなのに何十年も聞いていなかったかのような懐かしい声をして、私は振り向いた。

そこには信じられないことに彼がいた。

彼は感激したように瞳を潤ませ、鼻の穴を膨らませながら腕を拡げて私へ愛を叫ぶ。

「近寄らないで！」

私は思わず彼に応えて今すぐ飛びついて抱擁したくなるのを拒否して、彼からむしろ後ずさった。

馬鹿な彼、馬鹿な私。彼がどうしているかなんて決まってる。約束を、守りに来たんだ。だって彼は誰より義理堅い。

彼は私の態度に戸惑ったように広げた腕をふらふらせながら結婚のために帰ってきたんだと言う。

私は泣きそうになるのを我慢して笑おうとするのに、頬が引き攣るばかりで上手く笑えない。

手にしている花束を抱きしめると茎が折れ曲がった。体が震えて止まらない。

ああ、高い花なのにと私はどこか冷静に考えていた。

「帰って！　今すぐ私の前から消えて！」

私にはこう言うしかない。

彼とはもう結婚できない。彼と一緒にいるわけにはいかない。

だってもう、二ヶ月も前に彼は死んでいるのだから。

私は何もなかったみたいに彼を受け入れれば、きっと彼は自分が死んでいると気づかないままに私と一緒にいて、愛してくれるだろう。でもそれは駄目。彼はもう死んでいて、天国へ行くのが一番幸せなのだから。

今度こそ私は、彼の訴えを跳ね退けなければならない。一年前みたいに折れてはならない。

「もう、私のことは忘れて」

私はもう、これ以上彼の重荷になりたくない。

「その、指輪…」

彼は戸惑ったまま、信じられないとばかりに目を見開いて、私を指差す。

視線を下ろすと私の左手薬指に、指輪。なにか気づいたのだろうか。

「私がない間に、他に男ができたんだな、売女」

ああ…なんて愚かで可愛い坊や。彼は自分で私の為に用意した指輪すらわからないのか。

それほどに、嫉妬で目が曇るほどに、私を愛していてくれた。それだけでも私はいい、もういいの。

久しい悪口は何故か泣きたくなった。

私は彼の有り得ない勘違いを、肯定する。

「ファック！ このっ、クソツタレのクソビッチが！」

すると罵倒と共に彼は踵を返した。罵声の語尾が震えていて、彼が泣いているのは明らかだった。

幽霊になってなお、私を愛して約束を守ろうとし、愛する故に涙まで流す彼に、私は愛おしさでついに涙を零した。

「お前は最低の阿婆擦れだ。最高の愚か者だ。お前なんかを本気で愛するやつなんて、私しかこの世にいないんだ」

さらに続けられた言葉に、拭い止めようとした涙は止まるどころかさらに流れてしまった。

彼の言うことは正しく正しい。彼以上に私を愛してくれる人間なんて、世界中、どの時代を探したって存在しない。

言葉が出ないでいると、彼は歩きだそうとした。

「待って」

私はつい、引き止めてしまった。だけど、これが最後なのだ。声を震わせなかっただけ、私の理性は大したものだと褒めてほしいくらいだ。

彼はゆっくりと足を止めた。振り向かれない内にと、私は一つ呼吸をして涙を拭い、彼の背中を見つめた。

「振り向かないで聞いて。約束、守ってくれてありがとう。すごく嬉しいわ」

彼は全ての約束を守ってくれた。死ぬまで愛するということ。

一年後に会いに来るということ。

私はもう、一生セックスがなくても生きていける。彼の愛は、私を一生満たし続けるだろう。

「だけど、永遠にさようなら。ベイビーちゃん、別れの挨拶ができて、よかった…」

突然訪れた永遠の別れに、私は一週間は泣き続けていた。それがこ

んな形で顔を見て声を聞けてお別れができることに、私は生まれて初めて心から神に感謝した。

「クソツタレッツー!!」

彼は悪態をついて走り出した。そして、消えた。

馬鹿な坊や、愛しい坊や。

死んだことに気づかなくて、ここがお墓の前であるのに何も気づかない坊や。

彼が天国まで迷子にならないかふと不安になったけれど、大丈夫だろうと一蹴して改めて墓石に向いた。しゃがみこんで花束を備える。

彼の名前と、もう一人、私は優しい笑顔しか知らない女性の名前が刻まれている。

この、彼の15年前に死んだという母親がきっと彼を導いてくれるだろう。

彼の父親に見せてもらった写真でしか知らないけれど、とても優しい人で彼を愛していたらしいから、きっと大丈夫だ。

「ふふ…ねえ、聞いて」

話かける。今、彼は行ったばかりでここにはまだいないだろうとわかってはいるけど、もう癖になってしまったみたいだ。

「私ね、やっぱりお父様の好意に甘えることにしたわ」

だから、明日からは婚約者ではなく彼とは姉弟になる。もちろん、義理のだけど。

彼の父親は、彼と同じく義理堅くて律儀で優しくて、息子が心底愛した私はもう娘も同じだと、話にしか聞いていなくせに養子にすると言い出した。

彼の父親の粘り強さと、老後の世話をする人がいるという言葉に私は折れた。まだまだ、元気なのにな。

「ねえ…」

さつきは永遠にさよならと言ったけど。私の愛はかわらない。彼の愛もかわらない。だったら…

「ずっと、待つてるから、もし気が向いたら、また会いに来てね。お母様と一緒に、会いに来てね」

また、未練がましく涙がこぼれた。
やっぱり私は、駄目だなあ。

「…」

名前を呼ばれて振り向いた。彼のお父様だ。もうそんな時間だったか。

私は立ち上がりながら、少し無理矢理に微笑む。
今の出来事を話したら、信じてくれるだろうか。きっと信じてくれる。自分にも会いに来てって怒るかも知れない。

「お父様」

ああ、そういえば、彼は結局、私の名前を呼ばなかった。

馬鹿な坊や。

そんなところが、堪らなく愛しいのだけど。

愛を知った娼婦（後書き）

完結です。勢いで書き上げました。

個別タイトルは適当です。

2話目で女の態度はなんなんだよ、とか思ってくれたら狙い通りなんですけどでしたでしょう。

記憶がないとかのあたりで死んでるのに気づいてる人…いますかね。女の態度はわりとわかりやすかったかなーと思います。

読んでくれてありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5720p/>

娼婦との恋

2010年12月30日21時15分発行